

「朝までここで反省しておれ！」

主人にそう言われ少年が突き入れられたのは、館の地下牢だった。鉄格子の向こう側から、主人の男は重ねて言う。

「この仕置き部屋でしっかり性技を叩き込んでもらうんだな」

男はにやりと笑うと、さっと踵を返し、元来た廊下を去って行く。

鉄格子の内側に残されたのは、全裸の少年と上半身裸の屈強な若い男たちだった。

薄暗い牢の中一。

下卑た男たちの笑い声が小さく響き渡り、少年の滑(なめ)らかな肌に無数の視線がそそがれる。

「というわけだから、明日の朝までしっかり俺たちで愉(たの)ませてもらおうとするよ」

男たちのうちの一人はそう言うと、少年を簡素な寝台の上に押し倒した。

裸体に鎖つきの首輪だけを身につけた少年には、この地下牢は肌寒い。

「はは、震えてるな。大丈夫さ。すぐに暑くなるようなこと今からするんだからよ」

震えているのは寒さのせいではなかったが、そんなことを伝えたところでもうどうにもならない。

少年はこの館の主人の性玩具だ。

ただただ主人の欲を満たすためだけに犯され続ける毎日一。

しかし、少年は性奴隷でありながら、一度も主人に犯されて快楽を感じたことがないのだった。幼い陰茎は扱(しご)かれればそれなりに気持ちよくなるものの、後孔となると話は別だ。何度その孔に指を突き入れられようと、主人のもので犯されようと、気持ちいいなどととても思えない。

痛みと尋常でない圧迫感だけが少年を苛(さいな)み、毎度のごとく悲鳴をあげるのが常だった。

「尻で感じたことないんだって～？」

「かわいそうになあ。毎日あいつの相手しねえといけねえのに、そりやつらいよな」

主人の男がいないのをいいことに、男たちは言いたい放題だ。

「あいつ、やり方雑そうだもんな」

「だな。もしかしてあいつのほうがこういうこと勉強したほうがいいんじゃないかねえ？」

「はは、言えてる！それで俺たちに奴隷の躰調教してほしいとか笑えるよな」

性奴隷を飼う者の中には、奴隷が行為中に嫌がったり痛がったりしていることに快感を感じる者もたくさんいるが、少年の主人はその逆だった。むしろ、自分の一物(いちもつ)で奴隷がよがり狂うさまを見て悦ぶタイプだ。

だから、今の少年の状況が主人にとっては好ましくない。

「さてと、じゃあとりあえず四つん這いになってね～」

じゃらりと少年の首からのびる鎖が引かれる。

「言っとくけど、俺たちご主人様への報告義務あるから、逆らわないほうが身のためだよ」

少年は怯えながら、言われるがまま広い寝台の上に手足をついた。か細い四肢が震えている。

これからまたいつもの痛く苦しいだけの時間がはじまる一。しかもこんな大人数を相手に一。

そう思うと同時に、少年の美しい顔は見る間に青ざめていった。

「じゃ、まずは俺のを啜ってもらおうか、な」

男の一人が少年の前に膝をつき、くつろげた服の中から自身を取り出して少年の艶やかな唇にあてがう。

「……っつ、」

濃厚な雄の香りにためらいながらも、少年はそれを口に含んだ。

歯を立てないように、唇と頬の内側の肉で包み込むように奥まで咥え込む。

主人との夜伽(よとぎ)のたびにさせられているので、要領はだいたいわかる。

—わかるのだが…

「おら、どうした」

根元まで咥える前に、少年の動きが止まった。

大きすぎる—。まだ芯を持っていない状態でこれなのだから、相当である。

男の先端は既に少年の喉にまで届いている。

「あ～、おっきすぎて入んなかったか。ま、いっか、」

いっか、と言いながら男は自身を浅く引くと、次の瞬間一息に少年の喉奥に突き入れた。

「ん” ぶっ……っつ」

喉の奥の奥まで突き入れられ、一瞬吐気が込み上げる。

息が苦しい。

可愛い顔してんじゃねえか、と男が言う。

「たまんねえな。ああ、そうそう。人のものを啜るときは、その人の目を見ようね？」

啜えさせられたまま頭部をつかまれ、上向きにさせられる。

少年は息苦しさに潤んだ目で男を見上げた。長いまつげが大きな瞳を取り囲んでいる。

「いい子だね」

少年を見下ろした男の口調は優しいながらも既に興奮を孕んでいる。

目一杯開かされた少年の唇から唾液が伝う。

男は少年の後頭部を掴むと、何度も自らの股間に押し付けるようにしはじめた。

「ん” む” ……ツツ、ん” ん” ん” ……ツツ！」

喉の奥に立て続けに肉の先端が突き入れられる。

「ん” …、ぶ、んん” …っつ、ん” …っ、」

四つん這いで男の視線に射貫かれながら口を犯される少年。

その脇腹や背に、他の男たちの武骨な手が這う。

「ここも弄(いじ)ってやろう」

そう言われ片胸の頂きを指の腹でくりくりと捏(こ)ねられ、ぞわりと上半身が粟立つ。

「肝心なところもな」

びくり、と今度は下半身が跳ねる。

幼い陰茎をやんわりと掴まれ、そのまま上下に擦られはじめたのだ。

「ん” …っ、ん” ん” ん” …っ、ん” ……っつ、ん” ……ツツ」

口では男のものを啜え、胸の頂きを苛(いじ)められながら幼茎を擦り上げられる。

恐怖でどうにかなってしまいそうなのに、茎部を擦られればどうしたって淫靡な疼きが腹の底を這った。青ざめていた少年の顔に一気に赤みが差し、鼻でしかできない呼吸が心なしか荒くなる。人形のように大きな瞳もますます快感に潤みはじめ一。

「そろそろ後ろ入れていいんじゃないか？」

「そうだな」

男たちの期待と興奮まじりの笑い声が頭上で取り交わされる。

いやだ……

少年は思わず視線で目の前の男に訴えかけたが、無駄なことだった。

ぬふ、と太い指が少年の窄まりの中心に埋められる。

「ん” —————ツツ、」

まだ痛みはないが、恐怖のあまり少年は喉の奥で絶叫していた。

潤んでいた目からぼろぼろと涙が零れ落ちる。

「ありや、泣いちゃった」

「こりやあ普段あいつによっぼどな目に遭わされてんだなあ」

「よしよし。お兄さんたちが気持ちよくしてあげるからねえ？」

前後左右からさまざまな声が降ってくるが、恐怖に支配された少年の耳にはどれ一つとしてまともに入っていない。

またあの地獄のような時間がやってくる。

毎晩寝台に押しえつけられ、ときには拘束具で脚を開かされたまま、何時間も主人のものや性玩具でなかを穿(うが)たれる。

少年が泣きわめこうが痛みに失神しようが、主人はお構いなした。

いやだいやだいやだー！

しかし後孔に突き入れられた指はゆっくりと、しかし容赦なく少年の奥へとわけ入ってくる。

「ん” ……っ、んん” ん…っ！」



ついに男の指は根元まで少年のなかに埋まってしまふ。主人に毎晩拓かれてい  
るものの、幼い少年のそこはまだ狭く、圧迫感に身じろぎせずにはいられない。  
相変わらず口を犯され前を扱(しご)かれ胸の頂きを舐(なぶ)られながら、少年は  
恐怖に震えることしかできなかった。

「十秒たったら指動かすからね」

背後の男はそう言うと、指を肉のなかに埋(うず)めたままじっとしている。

「へ～っ、お前結構優しいじゃん。そのままぐぼぐぼやっちゃえばいいのによお」

「バカ。感じる躰にして返さなきゃなんねえんだぞ」

男たちは少年を弄(いじ)りながら、まるで食事でもしているかのような気軽さで会  
話する。きつこういうことには慣れているのだろう。それはそうと—

「はい、ごー、よーん、さーん、にーい、」

「……ッ、」

背後の男が口にする数がゼロに近づき、恐怖に苛(さいな)まれた少年の目から

余計に涙が溢れる。

「ぜーろ、」

「ん” ん” ーーーッ」

男の指が少年の肉洞の奥で折り曲げられる。

やわらかな隘路の奥を揉み込むようにされて、いや増さる圧迫感に一瞬吐き気すらもよおす。少年の首筋と額(ひたい)には、既に玉のような汗さえ浮かんでいた。こんなことで気持ちがよくなるなんて、絶対にあるわけがない。

「これからゆーっくり可愛がってやるからな。そしたらだんだん好(よ)くなるはずだぜ」

指を入れていた男は面白い玩具を見つけたときのような、期待感に満ちた声色を隠そうともせずそう言った。どうやら少年の躰を開発し甲斐のある躰だと踏んだらしい。

「しっかりお兄さんたちが躰けてやるよ」

やさしくね、と低い声が耳元で囁かれ、少年の腰がびくりと跳ねた。